

『今村明恒伝』余録

第6回歴史地震研究会(1989・9・9)講演要旨

山下 文男*

ご承知のように、今村明恒研究については、今回の私の著書(『地震予知の先駆者・今村明恒の生涯』)の前にも、既に、いくつかの先駆的な著作があります。

順序で云いますと、今村明恒が亡くなった直後に書かれた武者金吉さんの「今村明恒先生素描」、宮村攝三さんの「前人未踏の分野」(これは今村明恒の歴史地震学の研究にスポットを当てたものですが)河角広さんの「今村明恒先生」

(研究業績など全般にわたったものですが)、藤井陽一郎さんの「地震学者今村明恒の震災論」、松沢武雄さんの「今村明恒とその地震研究」などであります。

当然のこととして私は、これらの文献も参考にさせて頂きましたし、松沢先生や宮村先生からは直接お会いしたり、手紙を往復したりして教えて頂きました。また、今村明恒のの子どもたちにも、直接お会いして取材しました。今村の郷里の鹿児島は無縁のこと、今村明恒の南海地動観測網の中心であった和歌山にも再三足を運んで、あれこれ取材しました。特に、現在、東大地震研究所の「微小地震観測所」になっている今村の、いわゆる「南海地動観測所」の本拠では、責任者の中村さんに、いろいろと資料を頂いたり教えて頂いたりしました。

それならお前は、これまで書かれている文献に何を付け加えたのか?

ある雑誌で書評をして下さった、ある若手研究者の方が、今村明恒には、ここ

に(山下の本)書かれている他にも、たくさんのお優れた研究や業績があるのに山下のそれは不十分であると、不満氣に書いていました。この本を材料として今村明恒をテレビで取り上げたときも同じことで、ある地震学者が、同じようなことをいろいろ云っていました。が、これには、ちょっと云い分があります。私は、地震学者でありませんで、ただ今村明恒を尊敬している在野の一人に過ぎません。それで、一般の方々に、かつて、今村明恒という国民的な地震学者がおられたということを紹介し、また若手の研究者にも、地震予知研究のために殉じた今村博士のような学者のいたことを忘れないで欲しいと訴えたいがために、ドキュメントふうの伝記として、この本を書いたのです。したがって専門家の方々にとって、そのような物足りなさがあるのは当然であって、そういう専門的な本は、科学史の専門家や、そのように仰っている学者・研究者ご自身が書いてくればいいのです。

それはそれとして、専門家の方々にも参考にしていただけるのではないかと思います。これまで余り書かれていなかった事についても、私は書いたつもりでいます。

まず、巻末に約28Pに及ぶ今村明恒の略年譜を付けておきました。生涯における区切り、動向などの他、彼の報酬がどのようになっていたか? 家族・父母・

* 〒022-0211 岩手県三陸町綾里石浜八ヶ森 75

兄弟のことなど、面白いものもあると思います。震災予防調査会関係の報告や地震学会の機関誌『地震』などに発表した学術論文などは膨大であって、これを一々書き込んでしまうと、それだけで一冊になってしまうし、学者・研究者の方々は大概バックナンバーを持っているか、何時でも、それが見れる環境にありますので、ほとんどを省略しました。それでも、可能な限り動向などは調査して書き込んでおきました。その後、分かったこともあって、機会があったら追記したいと思っていますが、これは、今後の今村明恒研究の素材の一つとしては役立てていただけるのではないかと思います。

今村の私生活については武者さんが若干書いておりますが、子どもさんたちの理解と協力もありまして割と詳しく書くことが出来ました。特徴としては、没落した士族（薩摩藩士）の子どもだった頃、ほとんど苦学生に等しかった学生時代、所帯を持ってからの約20年ぐらいは、鹿児島にいる両親への仕送り、転げこんで来た弟たちの養育と学費、その他、係累との関係もありまして、物凄い貧乏だったようです。そんな中で、夫人の義子さんと云う方が（やはり士族の娘でしたが）大変、出来た方で、この奥様が家を切り盛りし、この奥様に支えられて、今村は学者の道を全うしたと云えます。そして、この奥様に先立たれたことが、今村明恒の晩年の私生活を、より哀しいものにしたと云えます。

有名な今村・大森論争については、これまで書かれていたようなことですが、一つだけ、あるいは、私が知らなかったのかも知れませんが、これまで書かれていないことがあります。

今村・大森論争は最初が1906年

（明治39）、2度目が1915年（大正4）で、一応、論争は鎮静したわけですが、1922年（大正11）の6月、つまり関東大震災の約1年前のことですが、大森博士は、都市建築研究会というのに出席した際、こういう発言をしています。

「総ての研究から観察して当分東京には大地震がないと断定しうる」

断定です。当時、今村は、初めての洋行中でしたが、洋行から帰っても、この大森発言のことを聞かされなかったのか、それとも無視したのか、何も書いておりません。

しかし、経過的に見るとこの大森発言は、極めて軽率な、論争の一方としても、科学者としても、致命的な問題発言だったと云わざるをえません。「当分」と断っているのではないかという云い分も成り立つかも知れませんが、何しろ「断定しうる」とした、その1年後には大地震が起こっているわけですから。

大森博士は慎重な方だったというのが定説です。が、大地震への恐怖を鎮静するためとはいえ、この発言などは自信満々の雰囲気を感じさせますし、今村との論争の時、今村の説を「浮説」という、学者を相手にするには決定的な言葉で非難しているなどもそうですが、本当に慎重な方だったと云えるのかどうか、私は、大変、疑問に感じました。

大森博士には「お嬢さん」というあだ名があったとも云われています。人柄が物静かだったので、そういうあだ名になったのでしょうか。しかし、人柄が物静かであるから学者として慎重だということにはならないわけで、何よりも、誰よりも地震を恐れている建築専門家の集まりでの断定的で自信満々の発言などを見ますと、仮にパニックを恐れたにし

ても、もっと、ものの云いようがあったはずで、どう考えても、慎重な方だったとは云えないように思われてなりません。

今村明恒博士が私財を投じて張り巡らせた「南海地動観測網」については、ご承知のように、それが7カ所にあったことが紹介されているし、その意義に関しても、様々な文献で論じられています。しかし、それが一体、何処と何処にあって7カ所だったのか、どういう設備内容のものだったのかについては、松沢武雄先生がちょっと書いているだけで、余りはっきりしておりませんでした。

この点では南海地動研究所の主任であった、次男（今村博士の）の今村久氏の協力がありまして、それらの場所と設備の内容、設備を取り付けた地震学者や、協力、研究した学者の名前なども明らかにしておきました。

例えば、和歌山県田辺の地動観測所の傾斜計は、後に地震研究所の所長になられた高橋龍太郎さん、徳島県富岡の観測所の傾斜計は、これも地震研究所の所長になられた那須信治さんが取り付けに当たっていますし、田辺の観測所の隣には、後に、中村左衛門太郎さんが地磁気観測所をつくって協力研究をしています。和歌浦の観測所の傾斜計は石本研究室のシリカ傾斜計が洞穴に付けてあったのを譲り受けたものでした。

「7カ所」という観測所の数について云うと、結局、これははっきりしませんでした。造った数で云えば10カ所以上もあるし、最後まで残っていた数で云うと、もっと少なくなります。ですから私は、数は書かずに、傾斜計を設置した所、地動計を設置した所、地動研究用の特殊な検潮儀を設備した所、戦争のためではな

く、今村博士が、此処は必要がないと云って途中で廃止した所などを明確にし、それを地図に書き込んで、見やすい一覧表にもしておきました。写真も一部を口絵として載せておきました。この項は私としては一ばん力を入れたつもりなのですが、整理して見て、やはりこれは、とてつもなく壮大な大事業だった、今村明恒と云う学者はやることのスケールが大きかったと思いました。

なお、京都の桃山に建設した桃山地動観測所と、戦争の末期の1944年（昭和19）の3月に東海地震を予知しようとして愛知県の渥美半島、福江町の東大水産実験場に設置した、地動研究用の特殊検潮儀のことは余り知られていませんが、東海地震予知の先駆的な試みとして、それも紹介しておきました。

ところで今村明恒博士は、大変、個性の強い人で、学者の世界では、性格的に余り良くは云われなかったようです。それを又聞きしていて、私の本を読んで、これまで大変、誤解していたという手紙をくれた方もあります。

歴史上の人物を評価する場合には、その人が歴史に何を刻んだのか？が評価の基準であって、その人物の、いわゆる癖だとか、細々した性格的なあれこれは、余り問題にすべきではないと思うのですが、よく、論争相手であった大森博士と比較して、今村博士の、個人的な、性格的な欠陥が書かれていることがありますので、若干、お話しします。

確かに、今村明恒は性格的には勝気で負けず嫌いであり、目立ちたがり屋だったとも云えます。金銭的にケチであったようにも云い伝えられているようです。

だが、それはただの勝気でも負けず嫌いでもなかったし、ましてや守銭奴的な

ケチなどでは断じてありませんでした。

まず、今村明恒のこうした諸々の性格的な特徴は、彼の生い立ちと学者としての不遇な道程の中で培われたものであったことを理解しなければなりません。そうでないと、人物評価としては、俗っぽい見方になって、かえって語る方の人間が問われることになりかねません。これは誰を評価する場合も同じだと思うのです。

例えば「目立ちたがり屋」だったというのも、23年間も助教授で「万年助教授」だなどと云われ、しかも、その上には、たった二つしか歳の違わない大森博士が、でんと座っていて、津波の原因論でも、関東大震災の予言問題でも、事々に押し潰されてしまう。今村の書いていることは「浮説」だなどとも云われる。教授に昇進する見込みもない。普通だったら希望を失ってしまうところです。しかし、今村は、何くそ、助教授だって学問的には負けるものか、学問的な業績で大森博士を追い抜くしかない、むしろ、それをバネにして地震学への意欲を燃やして、数々の業績を残しているのです。ですから「目立ちたがり屋」というのも、ただの自己顕示欲ではなく、学者的な負けず嫌いな性格の一つの現れなのです。もし今村明恒が、ただ温和なだけの事なれ主義的な勤め人的な学者だったら、いい人だったとは云われても、このような地震学史に残る立派な業績は残せなかったでしょう。

小さな時、家が貧しくて、毎日のように豆腐のオカラの味噌汁だったので、大きくなったら、毎日、豆腐が食べられるように出世しようとの大望を抱き、戦争末期になって豆腐が無くなるまで、毎日、欠かさずに豆腐を食べたという話を武者さんが紹介し

ていますし、私も書いておきましたが、今村明恒は、何にかかわらず、こういうことでは徹底していました。

似たような話ですが、裕福な士族が父親の失敗のために一転して貧乏になり、ついには売る品も無くなって、自分が木登りして遊んでいた庭木までが売られて行きます。彼は、幼心にも、やりきれない屈辱的な気持ちでそれを見ていたのでしょう。

後に東大を退官してから、今の成城に家建てて、この家に「煙霞荘」と云う気取った名前をつけます。彼の煙草嫌いは有名で、しかも徹底していました。嫌煙運動の先駆者でもあって、それについて書いたものもありますが、これは、煙草を吸う人の一生の煙草代で、この位の家が建てられるという意味で「煙霞荘」と付けたものだそうです。

ところで彼は、その「煙霞荘」の庭に、一所懸命になって木や草花を植えます。何でも百二十種、千株ぐらいあったようです。要するに、小さな時に、貧しさのために売られて行った木々を取り戻し、貧乏に復讐している心境だったようです。小さな時に食べられなかった豆腐を毎日食べたのも、勿論、好きということはあるのですが、云わば一種の貧乏への復讐だったように私は思います。もっとも、この程度のことなら、世間にもよくあることですが、今村明恒の場合には、学者としてのあり方にも、この執念が貫かれています。

武者さんは「先生は恩も忘れないかわり恨みも忘れない方であった」と書いていますが、何に関わらず相当執念深い性格で、例えば煙草を吸う相手を前にして、厭味たらたらに嫌煙論をぶつ、そして嫌われますが、そのしつこい性格が他面では、学者としての使命感やあくなき研究

心にも反映しています。彼が終生の大事業とした南海地動観測の仕事などは、その産物とも云えます。

今村博士は南海地動観測の仕事に、当時のお金で総額ほぼ十万円を投じています。家を除く財産の総てです。そして近々、南海大地震が襲来することを確信しながら、戦争のために、直前の兆候をとらえることに失敗して挫折し、最後は貧しく死んでしまいます。

まず、どういう事情と経過で今村明恒博士の南海地動観測の仕事が始まったのか？

関東大地震の後、これまでの歴史地震の分析から見て、次の大地震は南海道方面であろうと予感して水準測量をやって、それを確信するようになったという前提はあります。しかし、今日のわれわれの感覚で云うと、だからと云って、何も自分で金を投じてまで観測網を張る必要は無かったのですが、そこには学者としての今村明恒の生きざまと結びついた深い事情がありました。

一つは行きがかり上のことです。初めこの事業は、彼の、まだ東大在任中に（大正の末期から昭和の初頭にかけてのことですが）東大の地震学科と地震研究所の事業として計画されたものでした。しかし文部省の予算が取れなかったのです。地震研究所の設立のときもそうだったのですが、彼の構想がとてつもなく大きくて、大学や文部省の理解が得られなかったし、肝心の学者仲間でも、今村明恒の例の「法螺」だと云うことで理解者が少なかったという背景もあったようです。更に、もっと奥を糺せば、当時の権力者の、地震研究に対する無理解と地震学に対する低い位置づけのためにこういうことになったのです。

関東大震災の直後には大騒ぎして、地

震研究と地震予知のためには金を惜しまないような話だったが、年ごとに覚めてしまつて関東大地震の調査記録の出版にさえ、文部省は金を出し渋るようになる。そして、これは重要なことですが、いつの時代にもあるように、そういう政治に対して理解を示す、物分りのいい学者が出て来るようになる。ここで名前を上げると差し障りがあるでしょうから、それは申し上げませんが、今村明恒の計画を「法螺」呼ばわりした学者たちもそうです。

今村が普通の学者なら「しょうがない」ということになって諦めるのですが、こうなると今村明恒という人は、むらむらっと、勝気と負けず嫌いの塊のようになってしまう。ああ、それなら俺個人でもやってやろうとなったのです。こうして、彼の東大在任中の昭和3年（1928）12月25日に、東大教授である地震学者の今村明恒の私的な事業として、公的、社会的、学問的、つまりは国家的な意味をもつ南海地動観測所の事業が始動したのであります。

ご承知のように今村は、大森博士と論争し、結果的には今村の危惧したとおりになって、関東大震災の後、一躍、時の人として脚光を浴びます。地震博士と云われ、地震の神様とまで云われて学者として人気の頂点を極めた形になります。当時の新聞などを見ますと、それは大変な人気で、スター扱いでした。大人の世界だけではありません。子どもを対象とした雑誌（『少年クラブ』）などにも今村博士が出て来る。今村博士がただの負けず嫌い、ただの勝気なら、勝利感に酔ってそれでお終いになったでしょう。しかし、今村は勝気で負けず嫌いではありませんが、同時に真摯な学者でもありました。表面はとにかく本質的には傲慢な人

ではありませんでした。

政府の理解がいただけない、予算もくれないから、南海地動観測の仕事は出来なくなりました、止めます、とは云わないまでも、それを理由にして手を引いてしまうということになれば、ああ、地震博士、地震の神様もその程度のものなのか、となってしまう。彼に、地震博士の「称号」を贈った一般大衆の、そういう声が背後から聞こえて来るような気もする。これでは地震学者として、国民への裏切りであり、学者として敗北ではないか。「君の地震博士もその程度か」と云って大森博士が地下で笑っているような気もする。勿論、これは心理分析と想像に過ぎないのですが、いずれにしろ、国民から与えられた名声に相応しく、学者としての生涯を全うしようと、彼は、ごく自然に考えたのだと思うのです。大学に定年があっても学問に定年は無い。この基本姿勢と、燃えたぎるような旺盛な研究意欲が、彼が南海地動観測の事業から手を引くことを許さなかった。彼自身の側から云えば、手を引くことを潔しとさせなかった。

こうして今村明恒は、南海地動観測の仕事の私的な事業として背負い込んだまま昭和6年（1931）の春、定年で退官するわけでした。

さて、背負い込んで見たものの、この事業には金がかかる。そこで彼は、彼の事業を理解する篤志家に寄付の形による援助を要請します。新聞社や団体、個人の理解者があって、ある程度の資金は集まります。が、とても足りません。それで今村個人で、地動観測に必要な設備費の大部分を負担せざるを得なくなります。日常の観測に必要な記録紙などの消耗品は東大の地震学教室から贈ってもらいますが、維持費は全て、今村個

人が負担しなければ何処からも出て来ない。設備費とそれらの費用が、トータルして、大体、十数万円にはなったであろうということです。

それにしても十数万円と云えば、当時の貨幣価値で云うと庶民の住宅を100戸ぐらいは新築できる大金です。何処から、そんな大金が出て来たのか？

実は、関東大震災の直後には収入もかなりありました。教授になって、まず給料が上がった。関東大震災の時の不眠不休の活動で、文部省から400円の特別手当でも貰っている。随分、原稿を書いています、その原稿料もあった。講演も東京は数えきれないほど神奈川、千葉などにも行っている。相手は一般庶民、学校、実業界、華族、皇室と云うように各界各層で、その講演料もあった。最低でも20円（当時の金で）ぐらいだったようですが、華族や皇室、財界相手の講演では、何でも、一回2000円ぐらい貰うこともあったようです。庶民の家を2軒新築できる金額です。実は、これを書こうとしたら、人の災難で金儲けをしたととられないだろうか？と心配する人もあったのであれも、そうだなあと思って止めたのですが、しかし、今村明恒という学者の偉いところ、ただ者でないところは、こうやって稼いだお金も退職金なども、全部、南海地動観測の仕事、つまり地震予知研究の仕事のために注ぎ込んでしまったことです。しかも、それを、学者として当然のこととし、一言も愚痴めいたことを云っていない。

今村は家庭ではケチと云われても仕方のないような節約家でした。奥さんが箱根に旅行したいと云う。成城は、当時（今でもそうかも知れませんが）有名な新興住宅地帯で、その夫人たちのサロンみたいなものもあって、集まると、よ

く旅行のことが話題になる。箱根の話も出る。しかし、今村夫人の義子さんは「末は博士か大臣か」と云われた時代の「博士夫人」でありながら1度も箱根に行ったことがないから、そのお喋りの中に入っていけない。それで、箱根に行ってみたくて云うのです。ところが今村は箱根に連れて行こうとしないし、行っても云わない。そればかりか夫人に対して、家で何度でも好きなだけお湯に入って、美味しいものを食べ、観光案内を見ていればいいじゃないか。「名人は居ながらにして名所を知るだ」などという理屈で、その箱根行きを許さない。子どもたちが新しい靴を買ってくれと云うと、自分が子どもの頃にはいたボロボロの靴のスケッチを描いて見せてたしなめ、けっして贅沢させない。収入がいくらあっても、一方ではこうやって節約し、そうやって蓄えたお金を、地震予知研究のために全部注ぎ込んでしまったのです。

こういうふうに関わらず、彼は、私生活ではケチケチしても、学問や研究のためには、けっして銭惜しみしない。ここが、ただのケチと違うところです。

先程もお話ししたように、南海地動観測の事業のためには設備費の他、日常的な維持費が必要でした。次男の久さんと云う方は実は高等商業学校に入っていたのですが、経済よりも理科系の方が向いているというので、高等商業を辞めさせ、自分が主任教授を勤める東大地震学教室で特訓して、この南海地動研究所の常駐の主任として配置します。これには事務所の経費を含めて毎月100円づつ送金しています。京都の桃山地動観測所には、その年の地震学科の卒業生であった川瀬二郎さんを配置しましたが、これは行動範囲が狭いということもあって給料は60円でした。この他、各観測

所には、日常の観測や管理をしてくれる補助者がいました。大抵は役場や学校の先生でしたが、これにも、毎月、2円とか3円とか、それ相応の手当てを送っています。しかも、戦後まで、ずうっと、約束どおりにこのお金を送つづけています。この点、まことに律儀な人でした。もっとも久さんは、いくら物価が上がっても、父からの送金は100円だけなので閉口した、とてもやって行けなかったと話していましたが。

もう一つ。各地の南海地動観測所の設備、それに京都桃山観測所の設備は(土地は別として)、全部、今村明恒個人のものだったわけですが、彼は、何一つ自分のものにはしておりません。桃山観測所などは立派なものでしたが、借地が桃山御陵の近くだから個人のものにするのは畏れ多いというので、自分で金を出して建てたのに所有権は東京帝国大学の所有にしています。これについては、久さんに宛てた葉書もあります。そのため、今村明恒が個人で建てた東京帝国大学所有の観測所で、極めて公的、国家的意味を持つ、今村明恒の私的観測が行なわれるという、当節では、ちょっと理解しかねるような、ややこしいことになっています。

川瀬二郎さんは、その後、今村明恒の次女と結婚していますが、これについて聞いたところ、「今村明恒先生は研究の鬼であって、観測さえできれば、建物の所有権などはどうでもよいという考え方だった」と、話っていました。

こういう点を見ましても今村明恒という学者は、地震研究とその実践のために生きた、私欲の少ない、純真な学者らしい高潔な学者だったと云えます。

今村明恒博士は昭和23年(194

8) 1月1日に78歳で亡くなっていますが、それは、貧しい死に方でした。河角さんや武者さんがこれについて書いてありますが、ちょっと誤解されている面もありますので、付け加えておきます。

貧乏は、第1には敗戦という事情があります。ただでさえ国民の大部分が喰うに喰えない時代でしたが、今村はその上、恩給を打ち切られてしまうのです。

今村は、東大の副手から助教授・教授と昇進したのですが、地震学教室には、有給の教授の枠があって、大森博士が、その教授でしたけれども、有給の助教授の枠はありませんでした。そのため、大震災の後、大森教授が病死し、その後任として教授になるまで、今村は、東大の助教授でありながら、兼任の「陸軍教授」として、中央幼年学校、後の陸軍士官学校の予科や士官学校で数学を教えることによって、陸軍の方から給料を貰っていました。したがって退官後の恩給も軍人恩給でした。ところが、この「陸軍教授」が、戦後の公職追放のときに、職業軍人と見なされて、公職追放ということになり、恩給も取り上げられてしまうという気の毒な境遇になります。

ついでに申し上げますと地震学教室に有給の助教授が付くようになったのは、戦後の浅田助教授からで、松沢先生が助教授だったときも、その枠は物理学科からの借り物だったそうです。とにかく、こうして今村は恩給が貰えなくなって、学士院会員としての僅かな手当てだけになってしまいます。その上、南海地動観測のために金を使い果たして、蓄えは勿論のこと、売る物もなかったという事情があります。

それから、宮村攝三さんら、当時、今村の周辺にあって手伝っていた人たちの他は余り知られていないようですが、

今村は終戦から戦後のあの混乱の中で、自分が創立者であり、編集長でもあった、地震学会と、その機関誌『地震』の発行維持、また、これも自分が創立者であり、初代理事長であった震災予防協会の維持のために、大変、金の苦勞をしたという事情も重なります。

今村は亡くなる数カ月前のことが、ある人のところに金の工面に出掛けています。プライドの高い人ですから、飢えても、個人的な生活費のことなどで人に頭を下げるような方ではありませんでした。何で、金が必要だったのか？地震学会とか、震災予防協会とか、南海地動観測所の後始末のためのお金だったようです。

武者さんや河角さんは、今村先生は貧乏で薬代にも事欠いたとか、先生から金の工面を頼まれたと書いていますが、私が遺族の方々から取材したところでは、ちょっと違います。弟の一人は、元・女子医大の教授・内科部長で、有名な医者でした。この人は兄・明恒夫婦による丸抱えの援助で東大医学部を卒業できた人ですから、当然のこととしてその恩義を感じて兄の治療に当たっています。また、かつて大森博士の最期を看取った医者で天皇の侍医長でもあった三浦博士も往診しています。ですから、庶民感覚で云うと「薬餌にも事欠く状態」だったとは云えません。

日常生活は確かに貧しかったでしょう。しかし、当時は国民の大部分がそうであって、今村明恒が、例外的に貧乏だったわけではありません。長男が大宮にあった農林省の種畜牧場長でしたから、払下げの肉なども運んだりしていますし、すぐ隣には長女も住んでおりまして、気配りもしていました。この点では、まだ恵まれた方だったとさえ云えるので

あって、当時、ある裁判官が、それで話題になったような「餓死」などということではありませんでした。

結局、今村明恒は餓死したわけではなかったが、彼の仕事、その生きざまと関係のある『地震』の発行や震災予防協会の維持などのための金に悩み、そのために私生活も極力、切り詰めなければならなかった、貧しかった、ということのようです。今村明恒がそれほどまでに犠牲を払って、あの困難な時代にも維持し続けた『地震』の編集に、今、携わっている研究者の方々や震災予防協会の方々は、是非、その歴史を胸に刻んで仕事をしていただきたいものと考えます。

いずれにしろ、あの忌まわしい戦争のために、壮大な南海地動観測の事業に挫折せざるをえなかった今村は、最期には、病床で『本邦大地震大観』の口述し続け、それを終わって、云わば刀折れ、矢尽きた感じで亡くなってしまいます。

今村の親友であった中村清二博士は「それは古武士のような清貧であった」と書いておりますし、松沢武雄博士も「地震学の発展にその生涯を捧げたこの老学者の晩年に最大の敬意と一掬の涙を捧げたい」との名文を残していますが、その伝記を書き終えて、私もまた、全く、同じような感慨であります。

最後になりますが今村明恒の伝記を書いてみて、どうしても解せないことがあります。

私は「あとがき」で、これほどの学者のまとまった伝記がないのは不思議であり、それをまた、私のような専門外の者が書くことに畏れを感じたとも書いておきましたが、どうして、これほどの学者の記念碑がないのかということも不思議でなりません。

ご承知のように寺田寅彦の記念碑は

郷里にあります。今村明恒については、彼自身が建立した墓が多摩墓地にあるだけで、何もありません。寺田寅彦と今村明恒とを天秤にかけるわけではありませんが、どう考えても私には納得がいきません。

建てようと思えば、場所は中々いい条件のところがあると思います。

東大地震研究所の和歌山微小地震観測所は、今村の死後、彼の南海地動研究所の建物を遺族が東大地震研究所に、そっくり寄付したものを基礎にして出発したものですから、あそこの構内でもいいし、あの観測所そのものを、よくありますように「東京大学地震研究所・今村明恒記念和歌山微小地震観測所」とするのも一案でしょう。いずれにしろ、今村は、東大の歴史にも残る「地震学科」の初代主任教授であり、この他にも、京都の桃山観測所など、私財を注ぎ込んで建設したものを丸ごと東大地震研究所に寄付したりもしている無私の学者なのですから、何かを残してあげてもいいではありませんか。

今村の鹿児島が生家跡は、今、鹿児島市の緑地公園になっていますがあそこでもよいでしょう。鹿児島は軍人や政治家、黒田清輝のような芸術家を輩出して有名ですが、今村明恒のような、日本と世界の地震学の歴史に残る科学者がいたことも忘れないで欲しいと思います。ついでに云うと今村明恒は理学博士ですが、次の次の弟（明孝）は工学博士、その次（明光）は、先ほども述べたように医学博士で、当時、鹿児島では「今村三博士」と云われたものでした。それなのに先祖の墓があるだけで、今は、何にもない。こうなると虚しいです。

亡くなったのが終戦後の混乱期だったという不運もあるでしょうが、そんな

に、莫大な金を必要とする事業でもない
ので、地震学会などで、何とか考えてい
ただけないものかと私は思っています。

いずれにしろ、今村明恒の人と生きざ
まは、大変、ドラマチックであって、そ
の人となりと業績は、地震予知が国民的
な関心事である今日、もっと世に知られ
て然るべきだと思うのですが、残念ながら
、それが、地震学徒の間ですら余り知
られていない、あるいは忘れ去られてい
るというのが現状です。不十分で、ある
いは誤りなどもあるかも知れませんが、
この一冊が、今後の今村明恒研究のため
に少しでも役立てば、と、思っています。